コート・ジボワールの食糧問題

——「食糧作物栽培」セミナーに出席して——

原口武彦

はじめに
I　開会式と基調報告
II　分科会報告
III　第3分科会の報告・討論
IV　閉会式

はじめに

1982年5月，西アフリカのギニア湾に面したコート・ジボワールの首都アビジャンで，国内の研究者，実務担当者を動員して「食糧作物栽培——コート・ジボワール農業発展の戦略的要素——」と題するセミナーが開催された。このセミナーは，私が現在，客員研究員として籍をおいているコート・ジボワール国立大学付属社会経済研究センター (Centre Ivoirien de Recherches Economiques et Sociales，以下の記述では CIRES と略記) が主催したもので，私もオブザーバーとして出席の機会を与えられた。

以下では，このセミナーの報告，討論の模様を，私の感想をまじえてルポルタージュ風に紹介してみたい。日本から遠い西アフリカのこの国で，食糧問題が今日，どのような性格を帯びて登場しているのか，そのことの理解に，この現地報告が少しでも役立てば幸いである。

I　開会式と基調報告

このセミナーは国立大学のキャンパスを会場に5月11日から5日間にわたって開催された。初日はまず午前10時から開会式。科学調査研究大臣，農林次官，国立大学学長らを来賓として迎え，200名をこえる参列者で医学部小講堂は超満員。ときどき国営テレビ局の取材用ライトがヒナ壇や会場のあちこちを照らし，会場の雰囲気をもりあげた。やや緊張した面持で CIRES 所長，アスタン (A. Astain) 氏がまず開会の辞。来賓各位の挨拶はいずれも型どおりで，このセミナー開催の意義，重要性を強調していた。その中でただひとり草稿なしにマイクに向った科学調査研究大臣ベラ・ケイタ博士(Dr. Bella Keïta)が「開発に役立つ調査研究」ということばをくりかえし，さいごに「ウフエ・ボワニー大統領万歳」と一段と声高に叫んで挨拶をしめくくり会場から一段と大きな拍手を浴びたことが印象的であった。聴衆は同氏の挨拶の内容よりもその熱弁の迫力に圧倒され，それにつられて拍手に力が入ったという感じであった。1938年生まれ，いかにも精悍な感じのする長身，筋肉質のケイタ氏。手ぶりをそえて熱弁をふるう姿からは，同氏が政界入りする以前は，植物学という地味な分野の学究であったとは想像もつかない。

「開発に役立つ研究」——ここでもでてきたなと私はおもった。コート・ジボワール全体の研究行政をあずかる同氏がこのような言葉をくりかえし用いたくなる気持は理解できなくはない。しかし実際問題として一つの研究がその成果として「開発に役立」ちうるものを生みだせるかどうか，その出発点においての判断はむずかしいのが研究というものではなかろうか。「開発に役立つ研究」という大義名分によって，真に「役立つ研究」の芽を，行政・管理の側がつみとってしまう危険性の方が大きい。研究にかかわる管理・行政は，その担当者が錦の御旗をふりかざし先導するのではなく，さまざまな研究者のさまざまな研究関心にもとづく研究活動を後からほどよく手綱をしめておくぐらいが適当ではなかろうか。その点，ケイタ氏は大丈夫だろうか。ケイタ氏の熱弁をききながら私はそんなことを考えていた。

午前中の開会式につづいて，早速，午後3時からセミナー参加者全員が一堂に会する全体会議が開かれた。出席者数は約130名。大きな長方形のテーブルを二重，三重にとり囲んで席につく。出席者を皮膚の色で分類（アラブ系を白人にくわえる）してみると，黒人と白人の割合は2対1ぐらい。黄色人は計画省に勤務するベトナム人とこの私の2人だけであった。10数名の女性出席者のほとんどは黒人であった。白人は，そのほとんどが技術協力などの関係で当地に滞在しているフランス人であった。

会議は主催者を代表して CIRES 所長アスタン氏が簡単な挨拶をのべたのち，同氏を座長としてすすめられることになった。まず討論すべき問題の枠組を設定する目的で基調報告を行なったのは，同じ CIRES の農業経済部門の責任者，Y・レオン (Yves Léon) 氏であった。同氏は79年以来，フランスの技術協力員の1人として CIRES に勤務し，この6月任期をおえて本国に帰国することになっている研究者である。

この基調報告とともに最終日の閉会式における最終報告者も，このフランス人研究者レオン氏であった。このことは，この国の研究部門におけるイボワリザシオン（イボワール人化）の現段階を象徴しているようでちょっと寂しい気がした。

レオン氏の基調報告は CIRES という組織の代表としていわば無人格的な立場で行なわれ，マクロ的な数字をもって，コート・ジボワールの当面している問題状況をおよそ以下のように素描した。

コート・ジボワールは，1960年から75年にかけて実質で年率7.4％の高度成長を持続してきた。これはコーヒー，ココアなど熱帯一次産品の輸出拡大と，それを資金源としての急速な工業化によるものであった。しかし最近の5年間，コート・ジボワールの経済成長率は内外の諸要因によって急激に落ちこんでいる。外的要因としてはコーヒー，ココアの国際市況の悪化，輸入石油製品価格の高騰などがあげられる。他方，国内要因としては食糧問題がある。1960年におけるこの国の食糧輸入は輸入総額の20％に達していた。それが70～75年の期間には15％，79年には12.7％と漸減してきている。この相対的減少に主に寄与したものは国内の食品加工工業の成長である。この部門の成長率は，60年から75年までの16年間に年率平均24.7％に達した。しかし，相対的には減少したものの，絶対額でみると食糧輸入は70年から79年にかけて年率16.7％の割合で増加してきているのである。この増大の一因としては，経済成長，都市化に伴う食慣習の変化ということがあげられる。それは地場産品であるヤム芋，キャッサバ，プランテン・バナナなど根茎類から輸入食糧の小麦，米（一部は国内生産）の需要拡大にむかっている。もう一つの大きな要因としては，国内における食糧生産の伸びなやみということが指摘できる。すなわち国内の食糧生産は70年までは人口の成長率にほぼみあうかたちで増大してきたが，70年代，とくにその後半に入ってからその成長は鈍化し，75～79年の年平均成長率はわずか1.2％におちこんでいる。その結果，コート・ジボワールは20年間にわたる高度経済成長にもかかわらず，また一部にはその結果として，輸入食糧に対する依存度が依然として高く，また今後さらに高まる危険性が存在している。

これが基調報告で素描されたコート・ジボワールが今日，当面している食糧問題の様相である。こうして当然の帰結として，国内の食糧増産，自給化 (l'autosuffisance) といういささか古びた課題が，政策当局の基本的戦略目標として今日改めて設定されることになる。この基本的戦略にむかって，今日の時点でどのような具体的方策が考えられるか，これがこのセミナーに課せられた基本的課題というわけである。

基調報告後は，それについての質疑・討論というよりも，近隣諸国から招待された研究者（カメルーン，ナイジェリア，ニジェール，ガーナから各1名）の自己紹介をかねたコメントを中心に出席者の意見交換が1時間半ばかり行なわれた。

パン・アフリカン開発研究所 (I. P. A. D.) のC・ディクメ (Cosmé Dikoumé, カメルーン) 氏は，「アメリカでは7％の農民が国民全体の食糧をまかなってあまりあるというのに，アフリカ大陸では60～70％の農民が30～40％の都市民の食糧をまかなえないでいる。また今日，世界で1分間に20人内外の幼児が死亡しているが，その半数以上はアフリカ人の子供たちである」と，アフリカ大陸全体が当面している食糧問題のきびしさを紹介した。

いかにもアフリカ大陸を基盤にする研究機関の代表らしいコメントであった。ナイジェリア社会経済研究所のA・オワォセクン (Akinola Owosekun) 氏は招待客らしく，コート・ジボワールの20年来の経済発展を西アフリカの模範であると称讃した。その後，単なる質問とことわってコート・ジボワールの産業各部門に占める資本構成はどのくらいかとつけ加えた。たまたま出席していた計画省の担当者がこの質問に答えて「食品加工工業についていえば，国家資本42％，イボワール人民間資本12％，ヨーロッパ系外国資本32％……」と事務的に数字を列挙していた。私には，オワォセクン氏のこの質問は質問のかたちを借りながらも，たしかにコート・ジボワールは高度成長を持続してきたが，そのうちどれだけが自国民の力で実現されてきたのかというコート・ジボワール経済の体質についての批判的意識のささやかな開陳のように感じとれた。

もっとも印象深かったのは，ガーナ大学のK・トゥム＝バリマ(K. Twum-Barima) 氏の挨拶であった。総じて

30代の若い人が多い出席者の中で頭髪に白いものが目立つ小柄なトゥム＝バリマ氏は長老といった風格を感じさせた。同氏はまず「自分は英語しか話せないので英語で話すことをお許しいただきたい」とことわった。そして，「植民地時代に教育をうけた自分の世代の人間にとっては，"English was English. French was French."だった。それが今日はかつての英領植民地の人びとも仏領植民地であった国の人びとも，同じアフリカ人としてこうして一堂に会して意見をかわすことができるようになったことはほんとうにうれしい。この機会に今まで隣国にありながらほとんど未知であったこの国の実情について少しでも理解を深めて帰ることができれば幸いである」と挨拶をしめくくった。西アフリカ諸国が独立を達成してからすでに20余年，同氏の挨拶の内容自体はとくに新鮮な要素を含んでいるわけではなかったが，同氏のことばには実感がこもっており，それが聞くものにつたわって大きな拍手がおこった。

参加者のほとんどは英語がわからないはずにもかかわらずこのような反応が即座におこったので，座長のアスタン氏は,「トゥム＝バリマ氏の発言の仏語による要約は割愛します」といった(ナイジェリア人のオワォセクン氏のときにはその発言内容を仏語に要約していた)。そのとたん抗議の声があがり，アスタン氏はそれにしたがってトゥム＝バリマ氏の発言を仏語で要約した。しかし，それはかんざましの酒のようなもので，出席者の間には改めて何の反応もおきなかった。討議は原則として仏語で行なわれたので，英語圏からのゲスト２人には，CIRES の英語のできる若手研究員が１人ずつ彼らの横に坐り，討論の内容をかいつまんで通訳していた。これは，トゥム＝バリマ氏の言ではないが，アメリカに留学した経験をもつ研究員の多い CIRES においてはじめて可能になったわけである。こうした英，仏二つの外国語をこなす新しい世代の抬頭により，アフリカにうちこまれた植民地国境のあつい壁が次第にとりのぞかれようとしていることを実感させられた。

II　分科会報告

第２日目からのセミナーは，食糧の生産を主題とする第１分科会，消費の問題を扱う第２分科会，そして流通過程の諸問題を扱う第３分科会の三つにわかれ，午前中は報告，午後はそれについての討論という日程で同時並行して進められた。第１分科会では16の報告が，第２分科会では８，そして第３分科会では13の報告が，それぞれ３日間（第２分科会だけは２日間）にわけて行なわれた。どの分科会にも魅力的なテーマの報告があり私は迷ったが，自分の研究テーマに関連する流通の問題を扱う第３分科会に参加することにした。したがって第１，第２分科会の報告，討論の内容については実際には知らないわけであるが，ここではこのセミナー全体として，どのような報告が行なわれたかを俯瞰するために各分科会の各報告テーマだけを要約・列記しておく。

第１分科会——食糧生産

1. 食糧作物栽培に関する資料収集についての諸問題
2. ティングレラ地方の土地占有状況の年次比較（1975年と1979年）
3. 食糧生産者の人口動態
4. 食糧生産における婦人の役割
5. 食糧作物栽培と社会的分業
6. 米商品化の壊滅——ブンジアリ郡の事例（1975～81年）
7. コート・ジボワールのメイズ生産の潜在的制約——helminthosporium maydis と tribolium castanéum
8. 食糧作物栽培の防衛——その方法と戦略
9. サバンナ地域における機械化と食糧作物栽培
10. 中部における小農経営の生産戦略
11. 食糧生産農業，技術変化，新国際経済秩序
12. 北部の商品作物メイズ——生産の適宜性と流通の問題
13. 中部における食糧作物栽培奨励策の制約と矛盾
14. 開発途上国農業の生産手段に対する補助金——ニジェールの場合
15. 農業の組織化と食糧生産に対するその影響
16. 地域開発政策と食糧作物栽培の推進

第２分科会——食糧消費

1. 食糧作物消費の変化と決定因
2. 地域別食糧作物消費パターン
3. 食糧消費における輸入品と外国市場の販路の展望
4. 食糧消費パターンの変化
5. イボワール人の食慣習の変化における医学的研究介入の主軸
6. 食糧作物の流通と価格構成要素についての予備的調査
7. コート・ジボワール経済発展における農業コンプレックスの重要性

8. 成長モデルと食糧生産の開発，多様化のための戦略

第3分科会——食糧作物の貯蔵・加工・保存，市場組織

1. 食糧作物の流通における伝統的諸構造の再評価
2. 商人間競争における特恵的関係
3. 都市成長：コート・ジボワール諸都市の地場産食糧供給方法の画定の試み
4. ブアケ西部におけるヤム芋の伝統的流通網
5. 都市化と商品化食糧作物農業の関係
6. 食糧作物農業における作物の貯蔵・加工・保存に関する諸問題——土着的方法と近代技術
7. 流通過程における生鮮根茎類の保存方法
8. 食糧作物の乾燥と保存——メイズの場合
9. 中部におけるヤム芋の保存について——当面する主要な問題
10. サバンナ地域における食糧作物の生産地から消費地までの経路
11. コート・ジボワール経済史における協同化運動と食糧作物の商品化
12. 食糧作物栽培推進における協同化運動の役割
13. 協同化による食糧作物の商品化

以上，全部で37の報告が行なわれたわけであるが，37人の報告者の国籍，所属機関について，その内訳をしらべてみた。まず国籍別内訳は，イボワール人もヨーロッパ人（ほとんどがフランス人であると思われる）もそれぞれ18名ずつ，アフリカ系外国人であるニジェールからのゲスト1人をくわえて，アフリカ側がやっと半数をこえるといった状況で，ここにも研究の分野におけるイボワリザシオンの遅れが如実に示されていた。私がこのことを調べているとき，同室のクアメ氏は，「アフリカでもコート・ジボワールは例外的に遅れているんだ」，とはきすてるようにつぶやいた。

所属機関別にみても，フランスのアジア経済研究所的研究機関(そのスケールははるかに大きいが)といえる海外科学技術研究所(ORSTOM) 所属の研究者の報告が七つもあり，主催者 CIRES の6報告を上まわっていた。もっとも多かったのは，大学およびその付属研究機関(CIRESを除く)に属する報告者で10名。関係各省に所属する報告者は8名(農林省3名，計画省3名，建設省，商業省各1名)，完全な民間人は，民間コンサルタント会社の研究員1名だけであった。

Ⅲ　第3分科会の報告・討論

さて第3分科会の第1日目，出席者は約40名，座長を中央に円卓会議風の席についてほぼ定刻どおり会議ははじまった。この日は五つの報告が予定されていたので，報告者1人の持ち時間は30分であった。各報告者のタイプ刷り数ページの報告要旨は，すでに前日の全体会議終了時に配布されていた。同様に翌日の報告は前日の会議終了時までに必ず配布され，またその日の討論の要約は，翌日の会議終了時までには配布された。研究員，事務職員あわせて30余名にすぎない CIRES の事務効率のよさには目を見はらされた。

第1日目の最初の報告は，地場産食糧作物の流通における伝統的構造を再評価すべきであると強調するものであった。これまでややもするとアフリカ人小商人によってになわれてきた伝統的な流通構造は，前近代的なものとして等閑視ないしは軽視される傾向があった。たしかに商品の貯蔵，運搬の効率，衛生面などで改善の余地はあるものの，彼らの活動を現場においてつぶさに観察してみると，彼らは商品と消費者の趣向についての経験的知識にもとづいて，状況にきわめて柔軟かつ迅速に対応していることがわかる。このいわゆる伝統的構造は，少なくとも当面は何ものによっても代替は不可能であろう。この伝統的構造の拡大が，コート・ジボワールの近年の急速な都市化に伴う食糧需要をみたしてきたのであり，この事実の正しい評価のうえにたって，この伝統的構造の積極的な側面を生かした流通機構の改革が構想されるべきであるというのが報告者 A・T・コビイ (A. T. Koby, CIERIA コンサルタント会社，地理学) 氏の結論であった。

1972年，地場産食糧作物の流通機構の近代化を目的として政府のきもいりで設立された半官半民の企業AGRIPAC が当初期待された役割を果たしえなかったばかりか，9年後の80年には経済的破綻によって解散を余儀なくされたという歴史的経験が背景にあるだけに，報告者の主張には説得力があった。しかし，次に行なわれるべき改革はどのようなものであるべきかという点になると，とくに積極的，具体的な提言はなく，伝統的構造の再評価という抽象的表現にとどまっていることがややものたりない感じがした。

当初の予定ではすでに記したように午前中は報告を連続して行ない，質疑討論は午後に一括して行なうことになっていたのだが，会場の雰囲気におされてこの日の座

長をつとめたフランス人のM・ヴィヴィエール (M. Vivier, 商業省)氏が，「何か簡単な質問があったら30秒だけ時間をとりましょう」と口をすべらせたのを契機に会場は蜂の巣をつついたようなさわぎ。そのさわぎの中で，私が「30秒とはまさに質疑の近代化ですね」とつぶやくと，すかさず隣席の人は「やはり質疑も伝統的な方法がよい」とニコリ。ここで各報告後に若干の質疑の時間をとるかどうかで15分ぐらいもめて，結局，当初の予定どおり質疑なしで報告をつづけることに決着した。

第2番目の報告者は若いフランス人の技術協力員であった。第1番目の報告者とは対照的に伝統的流通構造が経済発展の阻害要因になっているという前提に立って，コート・ジボワール北部の伝統的商業活動に関する実態調査の結果を報告した。その前提の是非はともかく，報告の主な内容は実態調査からえた，具体的事実の紹介であったので，私のように現地に精通していない外国人には関心をそそられる要素が含まれていた。しかし彼が報告を終わったとき，私の席の横の方からすかさず「Merci !! Monsieur le touriste !」（旅行者さん，ご苦労さん）と低いがするどい声がとんだ。私はドキッとした。そんな意識がこの会場の中に潜在していようとは，それまで全く気付かなかった。国立大学付属都市工学研究センター所属の研究員，J・ボグエ (J. Boguhe) 氏はサン・ペドロ市（アビジャンにつぐ第2の港湾都市として造成されている新開地）を事例として，都市周辺に農地を配置し食糧自給都市民を想定する意欲的な都市計画構想を提示した。同氏は技術畑の人であったが，この構想は明らかにコミューン的思想にうらうちされた構想であった。配布された報告要旨には「飢えているものは自由ではない。しかし他者に自分の食物を求めるものは，飢えているものよりもさらに自由ではない」といった熱いことばがちりばめられていた。

午後の質疑討論は，私の予想に反して，午前中の最後に行なわれた建設省に勤務するフランス人技術協力員M・アルノー (M. Arnaud) 氏の報告に集中した。同氏はこれまで多年にわたって，北アフリカ，南米に勤務し，その間に得た経験的知識も参照しながら，第3世界における急速な都市化にともなう食糧不足発生の不可避性を一つのメカニズムとして説明した。コート・ジボワールの場合も，もし都市化がこれまでのペースで進行するならば，農業部門における抜本的構造変革がないかぎり，都市における食糧不足の発生は必至である。その抜本的構造変革とは，商品化食糧作物に特化した資本家的農業経営の抬頭である。数字でいえば農家の10%が食糧作物の50%を生産するような構造が確立されることである。一部農民の切り捨て，いわゆる農民層分解の不可避性を冷たく，きわめて論理的にいいはなったこの報告は，多くのアフリカ人出席者にとってはきわめて挑発的であったようだ。録音用の一つしかないマイクを奪いあうほど白熱した討論は，それが白熱すればするほど，私の乏しい語学力では追跡不可能になったが，私の理解しえたところでは，発言者のほとんどは，古きよき共同体にとってかわる階層分化の進行した農村の未来像そのものが論理以前の問題として受けいれられないといった感じであった。したがってアルノー氏がこの未来像は一つの論理的必然性にすぎないとことわって，その論理的整合性を説明しても，次から次へとその未来像は容認できないという批判が続出した。

自給都市民構想については，都市・工業部門が排出する汚染水の問題が指摘された。第1の商業の伝統的構造の再評価については異論を唱えるものはなく，一人の婦人出席者から，冷蔵庫もなく毎日，その日一日分の食糧を買って生活している庶民の主婦たちに，伝統的流通の零細な末端組織は適合しているといったような補足的指摘が行なわれたにとどまった。

第3分科会で発表された13の報告の中で，私にとってもっとも印象深かったのは，分科会第2日目に行なわれたC・クル (C. Krou) 氏の報告であった。国立大学付属民族学・社会学研究所研究員の同氏の報告は食糧作物の貯蔵・加工・保存の「土着的」方法について，同氏が行なった東南部一農村の住み込み調査で発見した諸事実の紹介が主な内容であった。同氏は，あきらかに自分の調査研究方法に独自の方法的意識をもっていた。他のいわゆる実態調査報告が複数の調査員を動員して組織的に調査を行ない，一個人では収集が不可能な，しかし一研究者が具体的に知覚的に認識できる範囲をこえた，多少なりともグローバルな統計的データーを提示していたのに対し，同氏の調査は大学の夏期休暇を利用して調査員を使用せず単独で行なったもので，同氏が自分の調査を「個人調査」(recherches personnelles) と呼んでいたのは意識的であるように感じられた。また同氏は用語の問題として，このセミナーでも頻用されていた「伝統的」という用語にかえて自分の考えをよりよく表現するために「土着的」という用語を用いるとことわった。それ以後，この分科会ではすべての発言者が「伝統的」ということばを発したとき，このことばにこだわりを感じるよ

うになってしまい，「つまりクル氏の表現によれば土着的な……」などとつけ足したりする人もいた。

同氏が東南部モロヌ地方のアニイ人(同氏もアニイ人)の一農村で発見したものは何であったか。そこにはやはり古い伝統に培われ，その土地に根づいた技術が存在するということであった。同氏の報告からその一例を紹介すると，たとえばヤム芋の保存に関しては次のような方法が用いられている。高さ2メートルぐらいの丸太を一定間隔にたて，そこに上・中・下3段に竿を渡して，フォンゴとよばれる物干場のようなものをつくり，そこにヤム芋10個ぐらいをかずらでゆわえてつるす。そしてその上をパーム樹の葉でおおい直射日光があたらないようにしておけば，品質の変化をきたすことなく最低1年間は保存可能である。またアニイ人の農村の食卓の豊かさを示す事例として，同村では実に17種のいんげん類が栽培されていることなどを同氏は指摘した。このような具体的事実の紹介がこの報告の主な内容であったが，それらは「わたくしたちはヨーロッパやアメリカに行って勉強してきました。しかしわたくしたちが子供の頃，はぐくまれたのはそれらの土地ではないのです。すべての個人の将来は，その幼年期によって条件づけられ決定づけられてさえいるということをわたくしたちは知っています……」ということばに示されているような土着への回帰，その復権といった氏の思想によって支えられており，同氏の調査はその思想の実践であることがよく理解できた。同氏の一つ一つ言葉をさがし，それらを吟味してから発するといった感じのゆっくりした語り口も，魅力的で説得力があった。ただ，私には同氏の表情には人をよせつけないようなきびしさがあり，アフリカ人の表情に共通している余裕，寛容さといったものが感じらないことが気になった。

クル氏の報告のすぐあとは1日目の座長をつとめたフランス人技術協力員，ヴィヴィエール氏の報告であった。同氏は商業省の一調査部局の代表として，その部局で行なった放射線，冷凍など近代技術を駆使した根茎類の保存方法の実験結果を紹介した。採算的にみて現段階で実用化できるものはまだないというこの報告の結論と用意した草稿を，美しいフランス語でよどみなく，たんたんと朗読していたことが前のクル氏の報告とまことに対照の妙をなし，だれかが意識的に仕組んだ演出ではないかと疑いたくなるほどであった。

昨日の白熱した討論で時間の足りなさを感じていた出席者は，午後の討論を15分くりあげて開始しようという座長提案に全員こぞって同意した。しかし，3時15分前に集まったのは10人たらず，結局，討論がはじまったのは3時であった。討論は午前中の諸報告の内容からやや乖離して，食糧生産における政府の価格政策の功罪に集中した。コート・ジボワールでは，1972年，米の自給化政策の手段として設立された稲作開発公社(SODERIZ)が，生産奨励価格による政府の買上げを保証した。75，76年には生産は自給水準に到達し，この政策は功を奏したかにみえた。しかし肝心の稲作開発公社のほうが赤字の累積によって77年に解体を余儀なくされ，それ以後，生産量はともかく（公式統計では生産量は80年まで漸増している)市場に出荷される量は減少し，米の輸入が再び急増するという状況におちいった。つまり，奨励価格による増産という単純な図式はすでに経験的に否定されているわけで，こうした現実を前に政府はどのような価格政策をとるべきか（今日でも一応，価格は生産者価格から消費者価格に至るまで政府によって固定されているが，とくに生産者価格は低い水準におさえられ奨励的な要素はなくなっている）について議論百出。討論は一つの方向に収束していくというわけにはいかなかった。私は毎年くりかえされる日本の米価騒動のことを思いおこさずにはいられなかった。

そのほかでは，討論というよりもこの時間を借りての小報告といった感じで，キャッサバの工業的加工の成功例（乾燥してアチェケと呼ばれる料理用のあらびきの粉末原料をつくる）の紹介が興味深かった。発言者はアビジャンの北方200キロメートルの地方都市トゥモデイの国営工場でその加工生産に従事しているフランス人技術者であった。このアチェケ用のキャッサバ粉の工業的生産の見通しは明るく，現在，キロ当り150 FCFA フランで市場に卸しているとのことであった。オート・ボルタ，マリなど北部サバンナの食糧不足国への輸出も開始しているという。

第3日目の午後は各分科会の成果をもちよって，最終日の閉会式に発表される最終報告の草案作成のために小委員会が開催されるということで，報告・討論とも午前中に終了した。この日の三つの報告はいずれも，コート・ジボワールにおける協同組合活動に関するものであった。いずれの報告も，今日，コート・ジボワール政府が1960年代後半から新しい協同化政策として推進しようとしているＧＶＣ（協同組合指向集団——groupement à vocation coopérative) という前期的協同化政策の現状，見通しについて悲観的であった。CIRES のＫ・クアメ

(K. Kouamé) 氏は，まずGVC結成の状況を簡単に紹介した。それによると1969年に93しかなかったGVCは，10年後の1979年までに2176に増大し，そこに組織された農民は約13万人に達した。しかしその組織率は，農民全体の5.6％にすぎず，しかもその内訳をみると，その90％以上（2089集団）は輸出作物，コーヒー，ココアの出荷の共同化を目的としたものであるという極端なかたよりを示している。このような状況を紹介したのち同氏は「農業の協同化は国家の介入なくしては推進できないという意見には一理あるが，しかし協同化運動に国家が常に介入していることによって，協同化のイデオロギー的基礎であるはずの自立性，自発性，民主主義などがそこから奪いとられてしまっている」という逆説的状況が存在することを鋭く指摘した。これはおそらく単にコート・ジボワールだけにとどまらず，第3世界の多くの国々の協同化運動の現実にあてはまる指摘であろう。今日的状況では，農民の協同化とは農民にとってよりも国家権力にとって末端の組織化・動員の方法として要請されているといえるだろう。

しかし，クアメ氏の指摘に相槌をうちながら討論に入ると，国立農業開発銀行の担当官から，GVCを通じての農民に対する資金貸付けをめぐるスキャンダル——たとえば営農資金として貸付けられた資金が冠婚葬祭のために流用されてしまうといった類——のいくつかが紹介されたのを皮切りに，いわゆる「ダメな農民」の話が，井戸端会議風に展開しはじめた。私は，第1日目の最初の報告で，いわゆる伝統的構造の中で活動する卸売商が小売商に対して行なう掛売りの場合，何ら法的根拠となるような手続を経ずに行なわれている（せいぜいのところ卸売商側の台帳への一方的記入）にもかかわらず資金回収率は100％に近いという調査結果の紹介を思い出した。「ダメ」なのは少なくとも農民の側だけではない。それは「近代的」な農業金融制度と農民との関係の問題としてとらえるべきなのだ。いずれにしろ，政府の政策的農業金融がうまく機能していないということだけは確かな事実のようだ。「ダメな農民」についてのエピソードが次々に，あるときはおもしろおかしく紹介されている間，私はそのダメな農民の耳をもってそのおしゃべりを聞き，その農民の声を代弁する人が1人でもあらわれないかと耳をそばだてていたが，残念ながらついにあらわれなかった。しかしダラダラつづくおしゃべりに，ある意味でそれにたえられなくなったいかにも謹厳実直そうな一出席者が，GVCの会計監査の強化を分科会の勧告として提出しようと提案した。これにはさすがに賛同者はなく，この提案を契機に座がしらけてしまっただけであった。このしらけきってしまった雰囲気をさいごにひきしめたのは，国立工学経済学部教授Z・メグエ (Z. Meguhé)氏の発言であった。同氏は政府の農業協同化政策のあいまいさをやり玉にあげた。「政府は農民の自立化・協同化を推進するといいながら，コーヒー，ココア農民の協同組合が自ら輸出にまで手をのばすことは決して容認しないのである」。こういうきまった発言があると，そこには現体制に対する本質的な批判がひめられているにもかかわらず，いいものはいいという感じで，官庁関係者を含めて出席者全員からきせずして拍手がわいた。

かくして3日間にわたって行なわれた分科会の報告・討論はとどこおりなくおわった。

私にとってもっとも印象深かったのは，会場全体の雰囲気であった。躍動感というようなものを強く感じさせられた。報告でも討論でも聴衆は話の内容にきわめて敏感に反応を示し，つまらないとなるととたんに会場はしらけた雰囲気になり，あちこちで私語がかわされ，椅子をひく大きな音をたてて中座したりするものもでてくる。かとおもうとある発言を契機に会場の空気はひきしまり，討論は高揚する。その落差がきわめて激しくダイナミックである。

内容に関していえば，コート・ジボワールの農民は中央権力との関係で自立的な存在なのだということが，報告・討論全体を通じて強く感じられた。農民は条件が不利になれば，商品作物の生産をやめ，自給的な貧しくともものどかな昔どおりの生活にもどる自由をまだもっているようだ。生産奨励米価に対する農民の敏感な反応はその典型的な事例であろう。国家は，農民を都市食糧の供給者として「国民経済」に統合しようとさまざまな手段を講じているが，土地所有という強力な制度的強制手段を有していないことは，国家の側からみて致命的であるようにおもわれる。どのような不利な条件のもとでも，生きるために生産をつづけなければならない「土地なし農民」という範疇は，コート・ジボワールにはまだ原理的には存在していないのである。

Ⅳ 閉会式

閉会式は，開会式と同じ医学部の小講堂で再びヒナ壇に科学調査研究大臣以下の来賓をすえて，Y・レオン氏による最終報告と，科学調査研究大臣の挨拶をもって簡単におわった。儀式的に行なわれた最終報告には，各分

科会での報告・討論の結果が要領よくまとめてあったが，もちろん儀式にふさわしくないトゲの部分は注意深くぬきとられていた。だからというわけでもあるまいが，このセミナーについて連日，大きなスペースをさいて報じていた『フラテルニテ・マタン』紙（この国の単一政党機関紙，唯一の日刊紙）も，最後に掲載したのは科学調査研究大臣の挨拶の要旨であった。このようなセミナーの意義は，その成果として発表される最終報告書にあるのではなく，報告・討論の内容が参加者各自に一つの経験として根づき今後の活動のある種の糧を提供することにあるというべきであろう。

私にとって感動的だったのは，閉会式にひきつづいて行なわれたレセプションであった。大臣をはじめ関係官庁の幹部級が出席するレセプションであるから，かなり豪華に違いないと予想していたのだが，その予想は完全にはずれた。会場にあてられた飾り気のない医学部の小さな食堂は，百数十名の出席者ですしづめの状態。粗末なテーブルの上に数本のシャンペン。出席者数に比してきわだって少ない。しかしこうした際には何はなくともシャンペンというフランスゆずりの感覚がおもしろい。日本でいえば鏡ぬきといったところだろう。あとはぶどう酒，コカコーラ，ジュースなど。おつまみは，ようじにさしたウィンナーが最高であとはピーナツ，ポテト・チップスのたぐい。サーヴィスは，CIRES の4人の女子職員ではどうにも手がたらないということで，若手の男子事務職員，研究員まで動員されて，なれぬ手つきで額に汗にじませてボーイ役をつとめる。数万人のヨーロッパ人が居住し，租界的なややケバケバしい雰囲気の漂う，そしていたるところにいわゆるボーイがいるアビジャン市の中心部に住んでまだ1カ月あまり，そのケバケバしさにやや居心地わるさを感じはじめていたからかもしれないが，このような質素な情景が，私にはとてもすがすがしいものに感じられた。人びとのあいだをくぐりぬけるようにしてやっと辿りついたテーブルで，同僚の CIRES の研究員からシャンペングラスならぬ安物の肉の厚い普通のコップに半分ばかりついでもらった貴重なシャンペンの味は，ひとしおさわやかであった。これぞ l'autosuffisance（自給），コート・ジボワールの知性に栄光あれ!!

（アジア経済研究所海外調査員，在アビジャン）